連載
第78回

マスコミのタブー100連発〈78〉
乳房が再生した……！
AWG「波動療法」の驚異

地球環境評論家
船瀬 俊介（ふなせ しゅんすけ）

船瀬 俊介（ふなせ しゅんすけ）
1950（昭和25）年、福岡県生まれ。九州大学理学部に進学するが翌年中退、1971（昭和46）年、早稲田大学第一文学部に入学。学生常務理事として生協経営に参加。約2年半の生協活動の後、日米学生会議の日本代表として渡米、ラルフ・ネーダー氏のグループや米消費者同盟などを歴訪。同学部社会学科卒業後は、日本消費者連盟に出版・編集スタッフとして参加。1986（昭和61）年に独立。消費者・環境問題を中心に評論、執筆、講演活動を行い現在に至る。1990（平成2）年にラルフ・ネーダー氏らの招待で渡米、多彩な市民・環境団体と交流を深めている。著書に『新・知ってはいけない!?』（徳間書店）、『悪魔の新・農薬「ネオニコチノイド」』（三五館）、『病院に行かず「治す」ガン療法』（花伝社）など多数。
http://funase.info/

乳房は若い女性の大きさに蘇生した！

「波動療法を施したら、乳房が再生してきた！」

あなたは、信じられるだろうか。

その女性は、乳ガン手術で、右乳房の全摘手術を受けていた。

そこには無残な手術跡しかなかった。しかし、特殊な波動を与え続けたら、傷跡になにやら乳房らしきものが出現してきた。そして、しだいに隆起して少女の乳房のような姿を現して来た。思春期のような初々しさのそれは、成長を続け、いまや若い女性のような乳房となっている、という。

まるで夢物語のような話である。

しかし、これは実話なのだ。

一度失った臓器が、ふたたび出現する――そんなことが、ありうるのだろうか？

それはあるのだ。前回の連載で、電気波動の特定周波数がトカゲの失われた脚を見事に再生させるメカニズムを解説した。（ロバート・ベッカー理論）

よく「トカゲの尻尾切り」という。爬虫類のトカゲは、敵に襲われると、反射的に尻尾を脱落させ逃げ延びる。敵はクネクネと動く尻尾に気をとられてしまう。そのうちに本体は逃げおおせる、という算段だ。むろんトカゲにそんな知恵があるわけではない。まさに、大自然が与えてくれた生存のための反応テクニックなのだ。

トカゲの再生能力と生体電流の奇跡

トカゲには尻尾や脚を失っても、再生する能力が備わっている。

「それは、下等動物だからさ……」と肩をすくめてもしかたがない。なんと〝高等動物〟の人間でも「幼いうちは、指先半分を失っても再生する能力があ

（写真A）『クロス・カレント』

る」とベッカー博士は、断言する。（『クロス・カレント』新森書房　拙訳　写真A）

トカゲの前脚を切断しても、その傷口はしだいに盛り上がり、失われたはずの前足が、しだいに〝生えて〟くる！　そうして、ついに完全な形の前脚が蘇生、復活するのである。（図B）

そのメカニズムもベッカー博士は解明している。

まず、切断面に蘇生・治癒のための神経ネットワークが形成される。そこに、第一の「治癒電流」が流れる。その〝波動〟指示により、切断面の体細胞は、

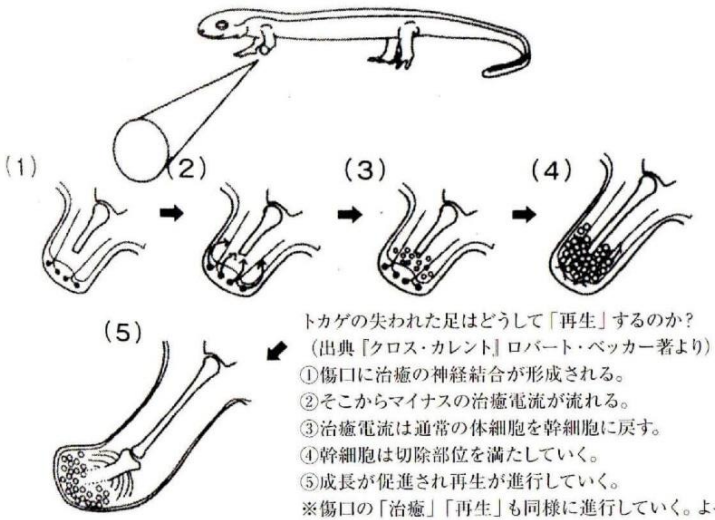
全て万能細胞に戻る。次に、第二の治癒電流が流れる。それは、特定部位ごとに特定周波数で、万能細胞に指令を出し、各々が、表皮、筋肉、神経、骨、血管……など体細胞に変化させるのである。

つまり、――体細胞→一次「治癒電流」→万能細胞→二次「治癒電流」→体細胞――というフィード・バックで傷口は「治癒」し「再生」するのだ。

一次「治癒電流」は、体細胞を万能細胞に戻す。これを「異化作用」と呼ぶ。

二次「治癒電流」は、万能細胞を体細胞に戻す。これを「同化作用」と呼ぶ。

「再生」と「治癒」の奇跡が明らかに！



トカゲの失われた足はどうして「再生」するのか？
（出典『クロス・カレント』ロバート・ベッカー著より）
①傷口に治癒の神経結合が形成される。
②そこからマイナスの治癒電流が流れる。
③治癒電流は通常の体細胞を幹細胞に戻す。
④幹細胞は切除部位を満たしていく。
⑤成長が促進され再生が進行していく。
※傷口の「治癒」「再生」も同様に進行していく。よって、消毒薬の塗布は再生のための幹細胞を傷害し、治癒反応を阻害し、遅らせるのである。

（図B）トカゲの前脚が蘇生、復活する。

（写真C）千島喜久男博士

（写真D）森下敬一博士

この神秘的かつ驚異の生命反応を半世紀以上も昔に、発見、解明した二人の学者がいた。それが千島喜久男博士（写真C）と、森下敬一博士（写真D）だ。よって併せて千島・森下学説と呼ばれている。

「食」は「血」となり「肉」となる。（同化作用）

古来よりの言い伝えは、正しかった。

空腹・飢餓のときは、逆に……。

「肉」は「血」となり「食」となる。（異化作用）

トカゲの脚の再生現象は、「肉」（体細胞）が、いったん「血」（万能細胞）に戻り、さらに「肉」（体細胞）に再生した、と見なせる。

ここで、だれでも想起するのがSTAP細胞であろう。森下博士は断言する。

「STAP細胞はあります。それは、リンパ球の一種でしょう。万能細胞であり、体細胞に変化するところを、小保方さんは偶然に目撃したのです」

現在、世界の研究者の論調は、当時と一転して「STAP細胞はある」に塗り変わっている。それどころか、ハーバード大チームがSTAP細胞の特許を申請した……というニュースまで、聞こえてくる。あのSTAP細胞騒動の真実は、小保方さんら理研チームの国際特許を封じるための陰謀であった。そ

（写真E）
『STAP細胞の正体』花伝社

れはまちがいない。（参照、拙著『ＳＴＡＰ細胞の正体』花伝社　写真Ｅ）

トカゲの再生メカニズムを解明したベッカー博士は「生命現象は電流刺激により営まれている」と主張している。（著書『ボディ・エレクトリック』より）

そして、解説する。

「病気とは乱れた電気波動で発症する。よって、正常な波動の電流を流せば治癒させることが可能となる」

トカゲの脚再生の一例からも生物の修復・再生に電気波動が、極めて大きな働きをしていることは、まちがいない。

奇跡の記録『「ＡＷＧ」は魔術か、医術か？』

冒頭の〝乳房再生〟の奇跡に戻ろう。

そのエピソードを記した本がある。

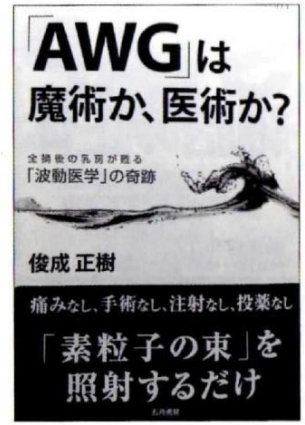
『「ＡＷＧ」は魔術か、医術か？』（俊成正樹著　五月書房）（写真Ｆ）

副題は「全摘後の乳房が蘇る　『波動医学』の奇跡」

「――東海地方のある市民病院で、右胸に乳ガン組織が見つかり、２０１０年２月、同病院で全摘手術を受けた48歳主婦の、えぐり取られた胸部から、奇跡のような『乳房の再生』が始まっている……。それを知人から聞いた時には『ありえない』と思った」（俊成氏）

人間の乳房の再生……!?

誰でもまさに一笑に付す。



（写真Ｆ）
『「ＡＷＧ」は魔術か、医術か？』

著者も耳を疑った。しかし、情報源は誠実な人柄。けっして、人をかつぐような人物ではない。

この〝奇跡〟を問い質してみると……。

「松浦優之（まつうらゆうじ）という医学博士の完成させた『魔術』のような『ＡＷＧ』の器具と気功術で主婦の乳房は蘇生した」という。

著者、俊成氏は１９３６年生まれ。一徹の老ジャーナリスト魂に火が、ついた。

彼は静岡に飛んだ。

「ええ、それはミチコさんのことです。豊橋市民病院で、右乳房の全摘手術を受けた方ですよ。全摘の手術跡から、『はまなこ健康ビアーラ』でおこなった波動照射の効果で、乳房が蘇生したのです……まちがいありません」

はっきり答えたのは女性気功師の高橋佐智子氏（当時63歳）（写真Ｇ）。彼女は『はまなこ健康ビアーラ』という療養施設の経営者でもある。その特徴は鉱石砂風呂だ。一種の温熱療法である。浜名湖周辺では、古くから「お棺に入れる前に、まずは砂に埋めろ」の言い伝えがある。砂（鉱石）からは遠赤外線などが放射されている。それによる温熱効果などで、末期の患者や、息を引き取った患者ですら百に一つは蘇生するという。

（写真Ｇ）
気功師の高橋佐智子氏（当時63歳）
出典：『「ＡＷＧ」は魔術か、医術か？』

「砂風呂に入るお客様は、どなたも、紙（ペーパー）の下着に着替え、横になっていただきます。……ミチコさんの胸を見たとき、思わずハッとなりました。すり鉢の底のようにえぐられた手術跡のひきつれがむざんに残る右胸を、ペーパーで隠しながら、入浴

されていました。抗ガン剤の副作用で頭髪は、ごっそり抜け落ち、丸坊主でした」

高橋氏はミチコさんをなんとか救いたいと、必死でケアに努めた。こうして、砂風呂療法と気功を受けながら一年が経過……。

同施設は、２０１１年４月、新医療器具「ＡＷＧ」を導入した。

「素粒子の波動束を発生させ、人体の深部を『波動』エネルギーで満たすのです」（高橋氏）

正式名称は「Arbitrary Waveform Generator」（段階波動発生装置）。「ＡＷＧ」は、頭文字を名称としたものだ。

高橋氏の説明によれば「たんなる医療器具ではなく、身体の痛みを和らげ、まるで魔法のように、安楽な時間を作り出す」という。

優れた気功師でもある高橋氏は、気功の説明もじつに論理的だ。

「私たち気功師のおこなう『気』の注入は、気功師の身体が大気中から取り入れ、蓄積して発する波動エネルギーで、経絡や経穴を刺激し、相手の全身を活性化させるのです。人はだれもがオーラを発し、存在感を放ち、気圧されたり、元気を人からもらったり、他人にあげたりしています。『気』は、だれもが日々体験する個体の生命パワーなのです」（同書より）

しかし、この気エネルギーには、個人差がある。気功師でも差がある。

よく、日本語では「気の強い人」「気の弱い人」という。

まさに、読んで字のごとし。

「……ところが、この『ＡＷＧ』は、（気功のような）人から人への『気』の注入ではなく、人工的にプログラミングさせた波動を、段階的に発生させ、集めて、人体の深部に働きかけるのです」（高橋師）

この「ＡＷＧ」治療を受けた人は、例外なく、えもいわれぬ快感に満たされる……という。

「全身が暖まり」「患部の痛みがとれ」「精神が快活になる」

とくに女性客に評判がいい。ある女性いわく、身体が軽くなる……この世の極楽という。

幼い膨らみは若い豊かな乳房に成長した

高橋師は、ガン手術後に、頭痛に悩むミチコさんに、この「ＡＷＧ」療法を試みた。通常は波動注入する電極パッドを一枚は頚椎、もう一枚は腰椎に当てる。しかし、気功師として一工夫して「胸先」と「へそ」の位置に当て、約2時間あまり通電した。

第一回通電の後、ミチコさんは笑顔で言った。

「なんとも、不思議な感じです。文字通り身体が軽くなりました！」

それから3週間。彼女は「右胸の奥がムズムズする」と言い出した。

「何かが生まれてくるような……」

5週間……経過。

「すりばち状にえぐれ、茶褐色のケロイド状だったはずの傷跡の奥から、ピンク色を帯びた白い肌が、ふっくらと盛り上がっていた」（『「ＡＷＧ」は魔術か、医術か？』より）

3か月がたった……。

「ほら、見てよ、さわって……」

ミチコさんは、笑顔で砂風呂に来る女性の客友達に、見せた。

「そこには、さかずきをひっくり返したような、つつましい桜色の膨らみが隆起していた」「気功を行う高橋の指先は、ミチコの隆起しはじめた膨らみの中心、その奥に、ぽっちりと小さくも固い乳頭を探り当てた」（同書）

奇跡の再生乳房は、その後、順当に大きくなり、２０１１年には「小学上級生なみに成長」し、現在は、まさに若い成人女性のような乳房となっている。

疾病を69種の周波数「波動」で治癒させる

この「AWG」の概要は、発明の中心人物、松浦氏の『米国特許申請書類』で知ることができる。

(1)電極を張り付けることなく、低周波（1～1万ヘルツ）を一定時間ごとに順次高くして治療する。

(2)特定周波数（たとえば1～1万ヘルツ間では69種類の周波数）が、とくに治療効果を有することを見出だした。

(3)本発明は、それにもとづき、あらかじめ選択された低周波電流により治療する。

(4)疾病の種類ごとに関与する細胞、筋肉系統、血管およびリンパ系統が異なる。それで、これら細胞に対応して特定周波数を疾病種類ごとに選択し、組み合わせると、きわめて良好な治療結果が得られる。

それは、約430種類の疾病名に応じた特定「コード番号」にダイヤルを合わせ治療する。それだけで、乳ガン、肝臓ガン、肺ガン、胃ガン、大腸ガン、骨ガン、重症筋無力症、脳梗塞、心臓病、関節リウマチ、くる病、腰痛、神経痛、水虫、白血病……などの病苦から解放される、という。

まさに「痛みなし」「手術なし」「注射なし」「投薬なし」……。

極めて高い奇跡の治療効果が次々に出現し、治った患者たちのクチコミで、「AWG」の存在を知る人も増えている。

20人の警察官による不当逮捕劇

発明者、松浦氏は1936年生まれ。孤高の獣医学者である。

「AWG」の完成までに15年以上の月日が費やされた、という。

その評判を聞き付け、ガン患者や難病患者が殺到してきた。やむをえず松浦博士は、「AWG」治療を施し、ほとんどの患者を治癒に導いた。

すると、ある日、20人の警察官が、松浦の会社に殺到。逮捕礼状を掲げた。そこには「薬事法違反」の逮捕容疑が記載されていた。さらに「証拠物を強制押収する」と叫んだ。まさに……不当逮捕。日本どころか世界の警察は「病人を治した人間は逮捕」「殺した人間は見逃す」のである。

この後、「AWG」は国家権力、さらにマスコミにより〝インチキ治療〟の濡れ衣、汚名を着せられた。そうして、実質、闇に葬られて今日に至る。

警察の襲撃は、絵に描いたような弾圧のやり口である。しかし、その「AWG」治療メカニズムはベッカー理論、ドイツ波動医学と、極めて似ている。

つまり近未来「波動医療」のさきがけであることは、明らかだ。

そのためロックフェラー財閥など国際医療マフィア支配下にある日本国家権力も、徹底的弾圧で、その芽を潰そうとしたのだ。

開発した〝七人の侍〟と軍産複合体

そもそも「AWG」開発は25歳で米国留学した松浦氏の呼びかけに賛同した計7人の研究チームで発足している。国籍はアメリカ、メキシコ、カナダ、日本の混成チームであった。

いわば、国際版〝七人の侍〟……。

しかし、その研究方針によって、チームは二つに分かれた。一つは、リーダー松浦を中心とした獣医学研究グループ。もう一つが、人体の疾病治療に「AWG」を応用しようとするグループだ。

後者グループには、思わぬバックアップが付いた。

「……それは、主としてカナダ・米国内の医師や、医学者や、分子生物学者による大規模な人体実験の『流れ』である。軍事医学上の必要が『流れ』を加速した。『流れ』の背後には巨大な『金主』が存在し、研究のための資金が動いた……そのスポンサーは、世界有数の軍産複合体企業（コングロマリット）で

あった」（同書）

なにやら、話は異様にきな臭くなってきた。

つまり、日本の一獣医学者が、仲間を募って始めた研究成果は、最終的には超巨大な国際利権に目を付けられたのだ。

軍産複合体といえば、国際秘密結社フリーメイソンの中枢組織イルミナティと一身同体だ。

その手先として日夜暗躍しているのが世界最大スパイ組織ＣＩＡ（米中央情報局）であり、諜報機関ＮＳＡ（米国家安全保障局）なのだ。

「『ＡＷＧ』は、数多くの難治症例を、『痛みなし』『手術なし』『注射なし』『投薬なし』のうちに緩和するすぐれた性能を秘めていた。集まってきた臨床データの多彩さを前に、スポンサー企業は、色めき立った。〝七人の侍〟も同じである」（同書）

とりわけ、「ＡＷＧ」はガン治療に目覚ましい効果をあげた！

まさに――奇跡のガン治療――が、ここに存在した。

しかし、それこそが「ＡＷＧ」波動療法を悲劇の運命へと導いた。

代替療法で「ガンを治す」と殺される？

「……１９７０～80年代当時のアメリカ国内法で、ガン治療に『抗ガン剤、切除手術、放射線照射』以外の方法を用いることを『厳罰』とする動きが表面化した」のだ。

つまり、ガン患者を代替療法や自然療法などで治すと、関係者は逮捕され、訴追され、投獄される。クリニックは差し押さえ、閉鎖、破壊の憂き目に会う。

まるで、冗談のような話だが、アメリカでは実際に、この理不尽な弾圧が日夜、強行された。『「ＡＷＧ」は魔術か、医術か？』の著者、俊成氏は、その背景をこう解説する。

「医学界の利益、薬品業界の利益を固守しようとする、議会内のつよい動きがあった」「まるで、『ＡＷＧ』誕生を間近に見越したような法規制だった。これを見て、（ＡＷＧ）人体実験のスポンサーは降りた。『ＡＷＧ』開発のため人体実験をやったこと自体、重大犯罪になりかねない」

まさに魔女狩り。空恐ろしい弾圧だ。闇から仕掛けた黒幕がロックフェラー財閥だ。〝かれら〟こそが国際医療マフィアの頭目なのだ。

この年代、食事療法などのガン代替療法は、次々に摘発され、関係者は逮捕された。そのため自然療法の関係者たちは、メキシコ国境を越えて〝亡命〟し、国境近くに自然療法クリニックを開設したのだ。

これ一つとっても、アメリカが「自由」「博愛」「平等」の国などでは、絶対にないことが一目瞭然だ。じっさいはナチスばりのファッショ体制国家なのだ。

しかし、米国民の99％は、同国が国際秘密結社フリーメイソンによって作られた〝実験国家〟であることに、いまだ気づいていない。

さて――。

このような非道な米政府による弾圧は、「ＡＷＧ」開発メンバーたちをも恐怖に陥れた。

「……『波動医学の研究者は、世の中から〝消されて〟しまう』とメンバーの一人が言い出し、あとの六人は青ざめた。これほどまで、すぐれた治癒結果（コードナンバー）が集まるとは、メンバーの当初の予想を超えていた」（同書）

「ＡＷＧ」は、とりわけガンに対して素晴らしい成果をあげた。それが、逆にメンバーたちに危機感を与えた。学界からの排除だけではない。身に迫る「暗殺」の危険が真剣に論議された。「残念だが、俺は降りる」と一人が首を振って言った。誰も反対しなかった。全員が同調し、七人のチームは散り散りになった。日本から来た松浦一人が、完成した疾病別「コード表」を日本に持ち帰ったのである。

こうして、「ＡＷＧ」は、松浦医師一人の手に委ねられた。

彼は、研究の火種を消すまいと、郷里、浜松で「AWG」を応用した治療研究を継続した。しかし、評判は、評判を呼び……何千人も患者が殺到してきた。

その必死の思いに応えるべく日夜奮闘した結果が、前述の警察による逮捕劇だったのだ。

生き延びた「AWG」を保健適用に！

1999年、浜松地裁で一審判決が言い渡された。

「……罪名、薬事法八四条、同二四条……ほかの違反。懲役一年六か月および罰金200万円。四年間の執行猶予とする」

そして……

『AWG』は、従来の医学の治療方法を、格段に進歩させた医療原理である」との松浦の主張は退けられた。判決文では「たんに、さまざまな周波数の低周波を身体に流す機能を持つにすぎない」と決め付けている。

松浦は控訴し、最高裁まで争った。しかし、いずれも棄却……罪状が確定した。

日本という国家そのものが巨大医療マフィアに乗っ取られているのである。裁判で勝てるはずもなかった。

しかし、「AWG」波動療法は、弾圧に屈したわけではない。

松浦の逮捕は医師免許を持たない獣医であったゆえに、狙い撃ちされた側面がある。医師は、自らの裁量で補助療法を行うことができる。ただし、ネックは「AWG」治療の原理を医学界（医師会、薬学会）が、まったく認めていないことにある。

だから、健康保険診療の対象外とされている。つまり、保健が利かない。受けるなら自由診療しかない。さらに、「AWG」治療は、患者一人あたり治療時間が長い。たとえば、四コードの照射治療を受けると一人当たり平均2～3時間かかる。よって、一回の治療費は最低で2万円で経営が、なんとか成り

立つという。

理想は、保健適用されることだ。しかし、悪魔と死神に牛耳られた日本の厚労省には、望むべくもない。

「AWG」治療器は、弾圧にもかかわらず治癒した患者さんたちのクチコミで、全国的に広まっている。その奇跡を紹介した『「AWG」は魔術か、医術か？』（前出）は、中古本はアマゾンでプレミアつきとか。関係者に取材すると「装置は、20年前に開発されたものなので、その後、改良が加えられ4タイプの機種がある」という。（写真H、I、J、K）

「周波数を組み合わせることで400種以上の疾病に対応できます」（同）。

気になる料金は「施設で異なりますが、一時間3000～6000円くらい」。

ただし「AWGは低周波治療器として、『効能』は『疼痛緩和』『マッサージ』しか認められていません。それ以外の効能は言えない」という。

各臓器に固有周波数！
世界は波動医療に向かう

「AWG」を取材して、ロバート・ベッカー「電気療法」理論など、他の波動療法との共通点に驚く。世界中のさまざまな分野で、各研究者たちが、暗中

模索の中で〝生命波動〟の真理に到達している……。それは、生命体の各組織、臓器は、各々固有の周波数を有する――という真理だ。

「基本原理は、１００年以上、昔からわかっていたんですね……」と、「ＡＷＧ」関係者は語る。各臓器の固有周波数の乱れを、外部から特定周波数の磁波・電波・音波などで修復補正すれば、各臓器は正常周波数に戻り、疾病は消えていく――。これが、波動療法の基本原理だ。逆に、各臓器の周波数の偏りを測定すれば、病んだ臓器が一瞬で検知できる。それを応用したのが「ニュースキャン」「メタトロン」などの測定器だ。一台３００万円ほど。全国の病院などで数百台も普及している、という。しかし、政府は、この機種を認めていない。これほど正確な疾病測定装置を公認すると、ＣＴやＭＲＩの利権が崩壊してしまうからだ。市場の既得権を守るためには殺人すらいとわない。

これが国際医療マフィアの恐ろしさだ。

しかし、薬物療法中心の誤った医学理論に基づいた現代医学は、大崩壊を始めた。もはや世界で１０００兆円とも言われる医療マーケットも、音を立てて崩壊していく。

その後には、真の生命理論に基づいた波動療法など、新しい医学が芽吹き、育つことは、まちがいない。

患者は、少食、菜食、断薬さらに筋トレ、長息などの自己努力を組み合わせて、これら新医学を取り入れれば、めざましい回復と健康を得ることができるだろう。

そうすれば、この波動「ＡＷＧ」療法も、その真価を大いに発揮するだろう。

失われた乳房の復活……という〝奇跡〟が、すべてを物語っている。

※「AWG」治療、問い合わせ先：
株式会社ジーウェーブ　TEL 0584-82-8078、FAX 0584-82-8079
http://gwave-company.jp